



# 妹は絶対君主なお嬢様!?

森野一角

illustration ©白猫参謀

美少女文庫  
FRANCE NOBUSHOIN

## プロローグ ＊メイド軍団に拉致されて!?

これを須藤<sup>すどう</sup>智<sup>とも</sup>の人生最大の困難と言わずして、なにを困難と言うべきだろうか。  
いや、ない。

（いやいや、それは日本語が破綻<sup>はたん</sup>してるから！）

目の前にある品を見つめるより、智は自分の悩みにツツコミを入れない気分だった。  
「お気に召しませんか？ 誕生日プレゼントに大人気の商品なのですけれど」

店員が、カウンターの上に置いた商品を手にとって智の前に差し出す。予算オーバーの値札がついたハートモチーフのシルバーネックレスに、智は大きく息を吐いた。

「いや、うん。人気があるのはわかるんですけど。でも、妹へのプレゼントとして、これはちよつと……」

「そんなことはないと思いますよ。仲のよい妹さんなのですよね。でしたら、きっと

喜んでくださると思います。その、変な意味には取らないと思いますよ?」

店員の言葉に、智は苦笑いで返すしかなかった。

(イヤ、悪いけど、しずかは絶対にそう受け取る子なんだよ)

智の脳裏に、自分と母親が違ななほしう妹——七星しずかの喜ぶ顔が浮かんた。

ほっそりとした肢体に、美しく腰まで流れる緑の黒髪。元氣なところと甘えん坊なところが魅力で、智のことを兄様と慕ってくれる美しい少女。自分と同じ遺伝子を持っていると言われても納得できないほど、異母妹の造形は神がかっていた。

智がしずかと出会ったのは十年前。彼女が母子家庭の智の家に預けられたとき、初めてしずかと彼女の父親(つまり、智の父親でもある)の存在を知った。

その後彼女は七星家に戻り、今は長期休みに遊びに来るだけの関係になったが、出会ってからの思い出は、智にとってかけがえのない宝物だった。

(まあ、そう受け取られてもいいか)

彼女は智の初恋の相手だった。兄妹だと教えられるまでに、彼女を好きになってしまったのだ。そして嬉しくて苦しいことに、それは両思いだった。

「こいつは覚悟の証、かな」

「お客様、なにか?」

「いや、なんでもないよ」

智はあわてて口をつぐんだ。

去年の誕生日の騒動のせいか、彼女はこの一年、智に顔を見せていない。だからいつそう、彼女の嬉しそうな笑顔を見たかった。

（ちよっと予算オーバーだけど、あと一週間バイトすればなんとか……）

携帯の画面でカレンダーを確認しながら指を折る智に、店員はもうなにも言わなかった。

品名が書かれたメモを渡してくれた店員に礼を言い、智はデパートをあとにした。冷房の効いたデパートの自動ドアを出た瞬間、ムツとする八月の暑気が体を包む。

「問題はどこでバイトするか……あれ？」

あからさまな違和感に、智の足がとまる。

車がひっきりなしに通っているはずの大通りに車はなく、人影もない。

そして見たことのない影が無人の道に落ち、上空では爆音が鳴り響いていた。

（……こんな映画、あったよなあ）

智は風ではためく前髪を押さえながら、他人事のように空を見あげた。

いや、他人事だと思うのが普通だった。

バリバリと轟音（ごうおん）をあげ、兵員輸送用ヘリコプターが都心上空でホバリングしている。

その光景は、智が知っている日常とはまったく異質にすぎる。

智がヘリを見つめっていると、操縦席の隣りで自分を指差している女性と目が合った。  
——シックなワンピースに清楚なエプロン、髪にはヘッドドレス。そして申しわけ程度に耳を覆う防音のヘッドフォン。その衣装はまさしく、

（め、メイド？ ヘリにメイド？ どうしてメイド？）

これ以上ないほど、非現実度がアップする。

（なにを話してるんだろう？）

メイドが口もとのマイクを押さえてなにか叫ぶが、もちろん聞こえるはずがない。  
突然メイドが目を見開いて立ちあがり、ヘリの天井に頭をぶつけてうずくまった。

「あ、あれは痛い……」

智が思わず顔をしかめた瞬間、ヘリの後部ハッチが開いてロープが投げ落とされた。  
「目標確認、確保に移れ！」

澄んだ声とともに、黒いエプロンドレス姿の少女たちがロープを伝いおりる。黒を基調にした制服を着た彼女たちは、大きめのサングラスと手に持ったロープの束と登場の仕方を除けば、どこから見ても普通のメイドだった。

（いや、充分普通じゃないから！）

状況にツツコミを入れる智の周囲で、メイドたちが歩みをとめる。そして、黒メイドの背後の無人の大通りにヘリが着陸し、さらに多くのメイドがアスファルトに降り

立った。

「はう、髪がボサボサ……」

副操縦席に座っていたメイドも、ふらつきながら地面へと降りる。ヘリのローターが巻きあげる風にあおられ、彼女の短めの髪や青と白を基調にしたメイド服の裾、胸もとの赤いリボンが激しく揺れた。

肩で切り揃えられた髪、服の上からでもわかる充分な胸のふくらみ、それに比べて引き絞られた細いウエスト、スカートからすらりと伸びる健康的な脚。身長は一六〇センチを超え、他のメイドと比べても長身の部類に入るが、威圧感を感じなかった。

（あれ？ この人、なんか普通だ……）

失礼とは思うが、そう感じてしまう。まなじりを吊りあげる黒メイド服の一团と違い、少し垂れ目気味の彼女には柔らかい雰囲気があった。顔の作りは明らかに美人なのに、智が感じた第一印象は「普通の人」だった。

そしてなにより智を安心させたのは、智と同じように戸惑っている彼女の表情。

「あのう、須藤智様ですよね。私は榊野未幸と申します。初めまして」

「ああ、これはごていねいに。じゃなくて！ これ撮影かなにか？」

「いえ。お迎えにあがりました。万難を排して可能な限り早急にお連れするようというお嬢様のご命令に、全力で従った結果……みたいです。あはは」

苦笑いで黒メイドたちを見た未幸は、反対ににらみかえされ、肩をすくめた。

「へ？ いや、でも、お嬢様なんて知り合いにいないし、人違いじゃない？」

「でも、須藤智様ですよ。お母様の名前はまどか様。智様の年齢は二十歳。中肉中背。成績は二流大学に合格するのがやっと。状況に流されやすく気がついたら漫画研究会に所属。彼女いない歴は長い。でも、ずっと好きな女の子がいて……」

「ごめんなさい、そのあたりで許してください。僕です。間違いなく僕ですから」  
思わず頭をさげてしまう智だった。

「では、ご同行いただけますね」

「いや、さすがにそれは。これからバイト探さないといけない事情があつてさ」

「ええっ!? 無理なんですか!？」

未幸は目を大きく見開くと、あわてて智の耳もとに口を寄せた。

「ええと、忠告しましたよ？ 恨まないでくださいね？」

ため息をつく未幸の背後で、黒メイドの一団がロープをビシッ!としごきあげた。  
「うそ、万難を排してって、マジですか？」

未幸の答えよりも早く、黒メイドたちはいっせいに動きだしていた……。